



「てつがくカフェ (café philosophique)」とは、わたしたちが通常当たり前だと思っている事柄からいったん距離をとり、「そもそもそれって何なのか」といった遡行的な問いを投げかけ、ゆっくりとお茶を飲みながら、他の参加者との〈対話〉をとおして自分自身の考えを逞しくすることの難しさや楽しさを経験するものです。1990年代に、フランスの哲学者マルク・ソーテが、パリのバステューユ広場にあるカフェで始めたのがきっかけとされています。

てつがくカフェ 「医療とケアを問い直す」

人の生老病死に深く関わる医療やケアの現場は、〈てつがく〉的な問いに溢れています。てつがくカフェ「医療とケアを問い直す」では、福井大学地域貢献事業の一環として、2016年より、医療やケアに纏わるテーマを、哲学的対話実践形式で問い直す場を拓いています。

1997年10月16日、「臓器移植法」が施行され、日本でも合法的に脳死者からの臓器摘出による移植医療が可能となりました。その後2009年7月に改正され、翌年2010年7月より「改正臓器移植法」が全面的に施行されました。「改正臓器移植法」では、本人の提供意思が不明な場合には家族の承諾だけでも臓器提供が可能となりました。「脳死」とは、人工呼吸器によって人為的に呼吸が続けられ心臓も拍動しているにもかかわらず、すべての脳がすでに回復不可能な仕方て機能を失っている状態（すべての脳の機能の不可逆的停止）のことを指します。これは、従来の死の判定（死の三徴候：(1)呼吸停止、(2)心臓停止、(3)瞳孔散大）とは合致しないものです。

そもそもこのような「脳死」と呼ばれる状態を「人として死んでいる」とみなすことを私たちはどのように考えるべきなのでしょう。そこには、医学的な問題や制度上の手続きとは異なったさらにその深いところに哲学的な問題が横たわっていることは間違いありません。

てつがくカフェ「医療とケアを問い直す」では、「脳死」の問題を2回に分けてシリーズで問い直しています。前回（第1回目）は、「脳死」に関する医学的アプローチ、社会的アプローチ、法的アプローチ、哲学的アプローチ、倫理学的アプローチの概要を確認した後、そこに潜んでいる哲学的な問題点をあぶり出しました。

例えば、全ての脳の機能が不可逆的に停止したとしても、拍動している心臓を見るととも「死んでいる」と見なすことはできない、脳死を「認める」とこと「人の死を受け容れること」には違いがあるのではないかと、など——次回（第2回目）のてつがくカフェでは、前回、導き出されたこのような哲学的な〈問い〉に、参加者のみなさんとの丁寧な対話をとおして応えていきたいと思ひます。皆さま、是非ご参加ください。

◆ 実施日:2019年9月29日(日)

◆ 時間:13時00分~15時30分

◆ 場所:大学連携センターFスクエア
(福井駅東口アオッサ7階)

参加無料、事前申し込み不要、どなたでもご参加頂けます。途中退出も可能です。

ファシリテータ:西村高宏(福井大学医学部 医学教育・倫理学分科)
ファシリテーション・グラフィック:近田真美子(福井医療大学 保健医療学部)
主催:てつがくカフェ「医療とケアを問い直す」(福井大学地域貢献事業)
共催:福井大学医学部附属教育支援センター、てつがくカフェ@ふくmedi、
問い合わせ先:ニシムラ(tanishi@u-fukui.ac.jp)



テーマ 「『脳死』を

哲学的に問う (2)